

競馬がますます
楽しくなる

続 ファンにやさしい

馬学講座

第 57 回

「背中が硬い」ってどんなこと？

講師

松山康久さん
元JRA所属調教師



案内人：辻谷秋人
text by Akihito Tsujiya

背中が物質的に硬いのではなく、
騎乗者が感覚的に感じるもの

「あの馬は背中が硬い」といった表現を聞いたことがあるだろう。

基本的に馬は背中がしっかりした構造の動物で、だからこそ人間がそこに乗ることができのだが、競走馬を指して「背中が硬い」というときは、どうもそういつたことをいっているのではなさそうだが、それは馬の走りや密接に関係しており、しかもあまりいい意味では使われていないように思われる言葉である。

そうしたニュアンスは感じられるのだが、実際にそれがどんな状態を指し、なぜいいことではないのかとなると、よくわからない人が多いのではないだろうか。競馬関係者、とくに厩舎関係者が使う言葉には、そうした「なんとなくわかるような気もするけれど、実はよくわからない」ものも少なくない。そこで、今回はそのあたりのことを、三冠馬ミスターシービー、ダービー馬ウイナーズサークルなどを育てた伯楽・松山康久元調教師に伺ってみた。

松山さんによると、馬の背中が硬いというのは「人が馬に乗って感覚的に感じ

るもので、背中の動きがしなやかでない、伸縮性がない状態を指します。これは各馬の「馬体のつくり」や「病的なもの」に起因しており、それらによって馬が重心を移動する際に反動が下へうまく抜くことができず、良いフットワークになりません。その結果として騎乗者が「硬い」と印象を受けるのです」

「チーターの走り方を考えてもらえればいいのですが、彼らは背中を大きく伸縮させることでストライドを伸ばしていきます。馬はチーターほど大きく背中を動かすことはできないのですが、それでも上半身を伸縮させて走っていることには違いありません。その伸縮性がない、うまく動かないことを「背中が硬い」と表現するのです。もちろん、馬の状態としては望ましいものではありません」

あくまでも馬の運動中における、背骨（脊椎）や各部関節の動きについて、騎乗者の感触を指しているのだ。

構造的なもの、病的なもの 硬い馬にはふたつのタイプが

「背中が硬い」馬にはふたつのタイプがある、と松山さんはいう。ひとつは体の構造からくるもので、いわば生まれつき

背中が硬い馬である。

「馬は種類や用途によって（アラブや重種など）特徴が違い、背中に必要以上に筋肉がついている場合があります。サラブレッドのように競走馬として用いられる馬にとって、それらはかえって背中の動きを阻害してしまうんです。背中の両側の肉が盛り上がった、いわゆる背割れをするような馬もそれです」

背中肉の肉付きは相馬（馬を見て能力や特徴を判断する）のポイントのひとつで、松山さんが馬を選ぶとき、この筋肉の厚い馬はなるべく避けていたそう。

生まれつきのものではあるのだが、成長上の若馬では、競走馬としての体ができあがってくると、この筋肉がすつきりして、背中が動きやすくなるものもあるそう。成長によって上手な走り方を覚えることもあるのだから、「背中が使えるようになった」などと表現されるのは、そんな馬である。

またこの他にも体の構造からくるものは蹄形、蹄質によるもの、繋ぎの特徴、肩や飛節の特徴など幾つかあり、これらが複合的に絡んだ結果、騎乗者が「硬い」印象を受けるそう。

「もうひとつは、いわば病的なもの。オーバークワークによる筋肉痛（いわゆる

コズミ）のほか、背痛、腰痛、四肢の疾患などが原因で、背中がうまく動かないことがあるんです。また夏負けなどのストレスがもとで、全身が硬直することもあります。そうした馬は大きくゆったり走れない、詰まり気味の走り方になってしまいます」

こちらのケースは背中が動かない原因を取り除くことで、動き自体を改善できる。例えば軽微なコズミが出ていたらウォーミングアップを入念に行うことで筋肉をほぐすことに努めるなど、正しく対処することで、背中が硬い状態を解消できるとのことだ。



松山さんが手がけたミスターシービーは、「ピロードのように美しい皮膚を持ち、乗り心地も素晴らしい伸縮性を感じる馬」だったという